

## 私たちは何を歌ってきたのか<sup>1</sup> “O for a Thousand Tongues to Sing”を例に

水野 隆一

### はじめに

私たち、ウェスレー・メソジストの伝統に生きる者は、「歌うメソジスト」であること、つまり、礼拝においても生活においても歌い、それによって信仰を養い、時に鼓舞し、伝道することを重要視することを自認している。様々なうたがある中で、チャールズ・ウェスレー作詞のものが重要な位置を占めていることは言うまでもない。

では、私たちは、チャールズの詞をどのようなものとして受け止め、歌ってきたのだろうか。本講演では、1780年の *A Collection of Hymns for the Use of the People Called Methodists*<sup>2</sup>以来、1番に掲載されてきた“O for a Thousand Tongues to Sing”を例に、次のような検討を行う。

1. 英語歌集に収載されている詞を比較する
2. 日本語歌集に収載されている日本語詞を比較する
3. 曲 (“tune”) との組合せによってどのような印象になるかを検討する

このことによって、チャールズの詞が、どのようなものとして受け止められているかを明らかにすることができると考えられる。

---

<sup>1</sup> 本稿は、2018年9月10日に日本基督教団渋谷教会において行われた、日本ウェスレー・メソジスト学会第20回研究会において行った講演を基にしている。

<sup>2</sup> *A Collection of Hymns for the Use of the People Called Methodists* については、いわゆる“bicentennial edition”を参照する（参考文献参照）。

## 1. 英語歌集収載の詞

- a. *Hymns and Sacred Poems* (1740年) から *A Collection of Hymns for the Use of the People Called Methodists* (1780年) へ

“O for a Thousand Tongues to Sing”の初出は1740年の *Hymns and Sacred Poems* (第2版) においてであるが、その際は、「ある人の回心1周年の記念日のために (*For the Anniversary Day of One's Conversion*<sup>3</sup>) 」というタイトルが付けられて、18節のものとして掲載されていた (図版1<sup>4</sup>)。この詞を、1740年版と呼ぶこととする。

一方、*A Collection of Hymns for the Use of the People Called Methodists* に掲載されているのは、9節しかなく、1740年版の7節を第1節としている<sup>5</sup>。この詞を1780年版と呼ぶ。この歌集は第1部に「導入的な賛美歌を含む (*Containing Introductory Hymns*) 」とタイトルを付け、その第1セクションを「神に立ち帰るよう、勧め、懇願する (*Exhorting, and beseeching to return to God*) 」としている。

この2つの版を比較すると、次のようになる。

1740年版		1780年版	
<i>For the Anniversary Day of One's Conversion</i>		<i>Exhorting, and beseeching to return to God</i>	
1節	賛美		

<sup>3</sup> この「ある人 (One)」とは、一般的に、チャールズ自身のことと考えられている。

<sup>4</sup> 図版は、1743年に発行された *Hymns and Sacred Poems* の第4版であるが、この詞の内容は同じものである。

<sup>5</sup> 1740年版の詞は、*The United Methodist Hymnal* (UMH) に58番として収められているが、17節は、人種差別的な表現を含んでいるからか、省略されている。

2～6 節	ゆるしの確信		
7 節	賛美	1 節	賛美
8 節	宣教への助けを求める	2 節	宣教への助けを求める
9～10 節	イエスによるゆるし	3～4 節	イエスによるゆるし
11～18 節	悔い改めへの呼びかけ	5～9 節	悔い改めへの呼びかけ

1780 年版は、1740 年版から、1～6 節の他、11、15、16 節を省いている<sup>6</sup>。省かれた 11 節は 12 節と、「キリストが語る言葉を聴くことで新たないのちや喜びが与えられる」と歌う内容が重複しており、1～6 節が省かれたのも、同じ理由からと考えられる。15、16 節は、悔い改めを呼びかける対象が、“harlots”、“publicans”、“thieves”などと列挙されており、聖書的な背景を持つものの、あまりに具体的になることを避けたのではないかと推測される。

1780 年歌集の発行以降、1780 版がスタンダードとなっていく。

#### b. 現代の歌集における詞

次に、アメリカとイギリスのメソジスト教会で現在用いられている歌集で、このうたがどのように掲載されているかを比較する。取り上げるのは、以下の 4 つの歌集である。

アメリカ The United Methodist Church

*The United Methodist Hymnal* (UMH、1989 年) 57

*Worship & Song* (W&S、2011 年) 3001

イギリス The Methodist Church in Great Britain

*Hymns and Psalms* (HP、1983 年) 744

*Singing the Faith* (STF、2011 年) 364

---

<sup>6</sup> UMH が省略した 1740 年版 17 節は、1780 年版では 8 節として収められている。

4つの歌集に収められている詞と1780年版とを比較したのが、論文末に掲載していた表1である。

この表から、以下の点が明らかとなる。

第1に、1780年版では省かれた、1740年版11節（“He speaks, and listening to his voice, . . .”）が、4つの歌集で回復されていることである。これによって、キリストの語る言葉によって、新たないのちが与えられることが明確になる。

第2に、1780年版6節と8節が、いずれも省かれている。これらの節は悔い改めの呼びかけを歌っているので、その省略によって、1780年版がこの詞を置いた第1部第1セクションのテーマ「悔い改めへの勧め」よりも、喜びが強調されるものとなっている。そのことは、1780年版5節を最終節とするW&Sでは、“for joy”が繰り返されることによって、いっそう顕著になっている。

第3に、イギリスの歌集では、1780年版7節が加えられて、イエスの贖罪が歌われている。

第4に1780年版9節の“With me, your chief”という表現が、“In Christ, our Head”と変更されている。これは、1740年版では、上述のように、具体的に「罪人」を上げて、「その最たる者であるわたしと共に」と歌われていたものが残されていたものである。現代の歌集においては、罪からの悔い改めへを呼びかける節が省かれてしまったために、この表現を残しては、かえって意味が伝わらないことになってしまう。そこで、「私たちの頭であるキリストにおいて」と音節数と韻律とが同じ言葉に置き換えたのだろう。

このような編集によって、この詞は、1740年版の「回心記念日のため」のうたから1780年版での「悔い改めへの勧め」へと意味づけを変えられたように、現代の歌集においては、新生とその喜びを歌うものという意味を与えられていると読むことができる。

## 2. 日本語詞の比較

次に、日本の歌集における詞を比較する。ここで取り上げるのは、次の6つの歌集である<sup>7</sup>。

『讃美歌』(1931年版≒1903年版<sup>8</sup>) 47

『讃美歌』(1954年版<sup>9</sup>) 7

『讃美歌21』 4

『聖歌』 91

『インマヌエル讃美歌』 29、88

『教会福音讃美歌』 254番

『聖歌』91は『インマヌエル讃美歌』30に再録され、『インマヌエル讃美歌』には、別の中田羽後による日本語詞(29)があるため、この詞の3つの日本語詞を収めている。これは、それぞれに、RICHMOND (CHESTERFIELD)、AZMON、LYNGHAMで歌うのに適した詞を作成したためと思われる(後述参照)<sup>10</sup>。

これらをまとめたものが、巻末に掲載している表2である。最左欄には1780年版の詞を記しておいた。これらから、次のことが見て取れる。

まず、『讃美歌』系列(『1931年版』、『1954年版』、『讃美歌21』)では、1780年版の1~4節と1740年版11節(“He speaks, and listening to his voice, …”)を採っている。これらの日本語詞では、細かな語の選択はあるも

---

<sup>7</sup> 『礼拝と音楽』175号には、AZMON’S GHOSTで歌うための林牧人氏による新たな日本語詞が載せられていて、興味深い読みを提供しているが、ここでは、現在、実際に、礼拝などで用いられている歌集に限った。

<sup>8</sup> 以下、『1931年版』と呼ぶ。

<sup>9</sup> 以下、『1954年版』と呼ぶ。

<sup>10</sup> 『インマヌエル讃美歌』88は、『聖歌』91を基にして、少し変更を加えたものと考えられる。この日本語詞は、LYNGHAMと共に『新聖歌』153に再録されている。

の、大筋として同じ内容となっており、この詞の理解が受け継がれていることが分かる。

『讚美歌21』では、これに、1740年版1節を最終(6)節として加え、頌栄としての機能を持たせている。これは、日本語詞の中では唯一の選択であり、このことによって、この詞を「礼拝 招き」の項目に収めるにふさわしいものとしている(ことに、「教会よ、歌いて祝え」)。なお、『1931年版』、『1954年版』では、5節の最後を「みなをたたえん」として、結びとしている。『1931年版』はこの詞を「禮拜 開會」、『1954年版』は「礼拝 讚美」に分類しており、この点でも、理解を継承していると言ってよいだろう。

中田羽後による日本語詞(『聖歌』91、『インマヌエル讚美歌』29)は、両者で、採用している節と日本語詞が大きく異なる。『聖歌』91では1780年版1~5節を採っているが、『インマヌエル讚美歌』29では1780年版1~7節に1740年版11節を(1740年版の位置に)加えている。

『インマヌエル讚美歌』29は、原詞を大きく解釈し直す詞を示している。2節は「きよきみ名を／よびとに知らする／使者となりぬ」と、原詞では祈りの文となっているものを、完了形で「事実」として語っている。4節は、イエスのわざについて語るものだが、中田羽後による日本語詞では、「この身は……いまやよし」と詩人(歌い手)が自分の状態を述べている。また、1780年版6、7節を採用するのはこれだけで、このことによって、『インマヌエル讚美歌』29は、「あがない」を強調するものとなっている。日本語詞では“tongue”(1節)を「ことば」とするものが多いが、この日本語詞だけは「ももちのした」としている。これによって「ことば」が一つの解釈による語の選択であることが明らかとなっている。

中田羽後による日本語詞の『讚美歌』系列との違いは、1780年版5節を含んでいることである。この節は、聖書に典拠があるものの(マタ11:4-5、マコ7:37、イザヤ35:5-6など)、身体に障がいがある人々に対する差別と感じられる語<sup>11</sup>を含んでおり、『聖歌』も、後の版ではこれを削除している。

---

<sup>11</sup> 原詞の語は、英語では差別的であるとは受け止められていないため、UMH、

私たちは何を歌ってきたのか？

この節に関する扱いで注目すべきは、『教会福音讃美歌』である。具体的な障がいや上げることなく、「心も体も／全くされて」と全般的な言葉にし、最終行を「主をたたえよ」として、「教会の営み・礼拝と諸式 讃美」に収めるに適したものとしている。

『教会福音讃美歌』の日本語詞を見ると、『讃美歌』系列と同じ理解を示していると言えるだろう。しかし、言葉の選択において、原詞にできるだけ忠実であろうとしていると言える。

これらの観察から、日本語詞は、全体として、この詞を「賛美」の歌として理解していると言えるだろう。この詞が置かれている歌集の項目からも、そのことがうかがえる。その際に、イエスのわざと救われている喜びを歌う節を含んでいて、賛美の「根拠」を述べるものとしている。

### 3. 曲との組合せ

詞を検討する際に取り上げた歌集では、以下のような曲（“tune”）がこの詞に配されている。それぞれの曲の後に、その曲を採用している歌集名を上げておいた。また、複数曲が採用されている場合は、(i)、(ii)と記した。

AZMON : UMC、『1931年版』、『1954年版』、『讃美歌 21』、『聖歌』、  
『教会福音讃美歌』

AZMON'S GHOST : W&S

BIRSTALL TUNE (BURSTAL)

LYDIA : HP (i)、STF (i)

LYNGHAM (DESERT) : STF (ii)、『インマヌエル讃美歌』 88

RICHMOND (CHESTERFIELD) : HP (ii)、『インマヌエル讃美歌』 29

日本の歌集では、AZMON<sup>12</sup>（譜例 1）が圧倒的に多い。これは、アメリカ

---

W&S、PH には 1780 年版 5 節が含まれている。

<sup>12</sup> 『讃美歌 21 略解』 所載の解説を参照（22 頁）。

ではこの曲で歌われることが多いことが影響しているだろう。

ウェスレーが“O for a Thousand Tongues to Sing”のために奨めているのは、BIRSTALL TUNE (BURSTAL) である。*Select Hymns: with Tunes Annex* (図版 2) にこの詞を配したものを譜例 2 に示しておいた(原調では高すぎるので、歌いやすい高さに移調したのも含んでいる)。意外なことに、短調で跳躍の多い曲で、拍子記号は C (四分の四) となっているが、実際は、二分音符を単位として歌うのがよいと思われる<sup>13</sup>。少しメランコリックとも言える旋律だが、18 世紀の嗜好を表していると思われる。ただ、この曲は、その後歌われることはなくなっていく。

イギリスのメソジスト教会の歌集は HP、STF 共に、LYDIA を(i)として載せている(譜例 3)。STF は初出の *The People's Music Book* (1844 年) を上げているが、Hymnary.org は、作曲者を Thomas Phillips (1735-1807) としている(STF も“possibly”として、Phillips の名を記している)。ウェスレーと同時代に作曲されたもので、平易で、BIRSTALL TUNE (BURSTAL) よりも歌いやすい。いつからこの詞を歌うものとして用いられているかは明らかではないが、HP、STF 共に(i)としていることから、もっとも親しまれていると考えてよいだろう<sup>14</sup>。

HP が(ii)として収めるのが RICHMOND (CHESTERFIELD) である(譜例 4)。これもウェスレーと同時代に作曲されたものである。3 拍子の流麗な旋律で、これまで言及した曲とは大きく性格が異なる。その結果、この曲で歌われると、この詞は優美さと高揚感を併せ持つものとなる。

STF は(ii)として、LYNGHAM を載せる(譜例 5)。楽譜から分かるとおり、合唱用として作曲されたもので、付点八分音符と十六分音符の跳ねるようなリズム、八分音符の連続が特徴的である。また、最後の行を繰り返して歌う。

---

<sup>13</sup> *Select Hymns* では、この曲は、“Thee We Adore, Eternal Name” (No. 34) と “O God, Our Help in Ages Past” (No. 35) を歌うことが指示されている。

<sup>14</sup> *Ancient & Modern: Hymns and Songs for Refreshing Worship* (2013) は、(i)に RICHMOND、(ii)に LYNGHAM を配しており、

先に述べたように『インマヌエル讃美歌』は AZMON の他に RICHMOND (CHESTERFIELD) と LYNNGHAM を収めており、それぞれに異なる日本語詞を当てている。編集の意図は不明だが、アメリカで歌われるものだけでなく、イギリスで歌われる曲を収めようとしているし、とくに、合唱用である LYNNGHAM を収めたのは、インマヌエル教会で聖歌隊、ないしは会衆がこの曲を歌うことを念頭に置いたのかもしれない。なお、『新聖歌』は『インマヌエル讃美歌』から LYNNGHAM とそれに合わせて歌われる日本語詞のみを収録している。

W&S は、AZMON'S GHOST という全く新しい曲を 1 番 (3001 番) に収めている (譜例 6)。この曲はもともと合唱曲として作曲され、その中では AZMON と組み合わせられていた。チャールズ・ウェスレー生誕 300 年を記念して出版された *All Loves Excelling: New Tunes to Familiar Charles Wesley Hymn Texts* (2007 年) に会衆で歌うものとして収められた。シンコーペーションを多用し、八分音符を連打するピアノ伴奏に乗せて歌うこの曲は、ここまで言及した曲とは性格を異にする。美しい旋律を歌うことよりも、リズムに合わせて詞を語ることを目的としているとも言えるだろう<sup>15</sup>。

この詞以外にも、イギリスではウェスレーと同時代に作曲されたものを歌う傾向があるが、20 世紀後半以降、新たな曲が付けられることも増えてきた (例えば、“And Can It Be”を歌う DISBURY (PH #216ii)<sup>16</sup>)。作曲者は Cyril V. Taylor (1907-)。同じ詞でも、異なる曲との組合せによって、歌う者は異なる感覚を受け、異なる内容のものとして受け止める。音楽を巡る環境が大きく変化している今日、新たな曲が作られ、よく知られた詞に新たな息吹が与えられることは、これから多くなっていくであろうし、それは、その詞が現代に

---

<sup>15</sup> 原曲の合唱曲は、次のところで視聴できる。

<https://www.youtube.com/watch?v=g8A1x2Xytkg>

礼拝の賛美歌として歌われているものは、次のところで視聴できる。

[https://www.youtube.com/watch?v=\\_5TapGnTjL0](https://www.youtube.com/watch?v=_5TapGnTjL0)

<sup>16</sup> PH #216(i)として収められているのは、この詞の曲としてもっともよく知られている SAGINA である。

も語りかける力を持っていることの証しと言えるだろう。

## おわりに

ここまで、“O for a Thousand Tongues to Sing”が、1740 年版から 1780 年版へと、大きく変化していること、そして、1780 年版以降は、これを元に詞の採用が行われていることを見た。それでも、1740 年版の詞は、11 節がアメリカやイギリスの歌集に採用されるなど、今も命脈を保っていることも明らかになった。

日本語詞では、どの節を採用するかの違いによって、この詞をどのようなものとして受け止めるかが変わってくることを見た。その際、『讃美歌』系列は『1931 年版』以降、同じ理解を示していること（『教会福音讃美歌』もほぼ同じ）、しかし、中田羽後による日本語詞、ことに『インマヌエル讃美歌』29 はこれらとは異なり、独自の詞を提示していることを示した。

曲との組合せについては、アメリカと日本では AZMON が、ほぼ唯一の曲であるのに対し、イギリスではウェスレーと同時代のものが好まれ歌われていることを示した。さらに、新たな曲が生み出されていることを、AZMON'S GHOST を例に見た。

私たちが「讃美歌をうたう」と言うとき、それは、「歌集から歌う」ということであり、そこには、必ず「編集」という作業が行われている。日本語で歌う場合は、日本語詞の作成という作業もそれに加わることになる<sup>17</sup>。従って、「チャールズの讃美歌をうたう」と単純に言っても、実は、編集されたものを歌っていることはあまり認識されてこなかったように思う。

1780 年版からも明らかのように、編集は、チャールズ存命中からジョンによって行われてきたのであった。だとすれば、21 世紀にチャールズの詞を歌うためには、どのような編集、日本語詞、曲との組合せが望ましいものなのだ

---

<sup>17</sup> この点に関して、講演の中では中田羽後による日本語詞を検討したが、『讃美歌』系列の詞の理解・受容に大きな役割を果たした別所梅之助については触れることができなかった。チャールズの詞の受容に、別所の果たした役割については、これからの研究が待たれる。

私たちは何を歌ってきたのか？

ろうか。「私たちは何を歌ってきたのか」という問は、「私たちは何をどう歌うべきなのか」という問へと直接つながるものである。

#### 参考文献

Franz Hildebrandt and Oliver A. Beckerlegge with the assistance of James Dale, eds.

1983 *A Collection of Hymns for the Use of the People Called Methodists. The Works of John Wesley, Vol. 7.* Oxford: Oxford University Press.

C. Michael Hawn, ed.

2007 *All Loves Excelling: New Tunes to Familiar Charles Wesley Hymn Texts—Tunes by Dan Damon, Amanda Husberg, Jane Marshall, Mark Miller, Penny Rodriguez, Carlton Young.* Nashville, TN: Abingdon Press.

日本基督教団讃美歌委員会編

1998 『讃美歌 21 略解』、再版、日本キリスト教団出版局。

Hymnary.org <https://hymnary.org>

(関西学院大学神学部教授)

——図版 1、表 1、2、譜例 1、図版 2、譜例 2～6へ続く——